

シダ類ノート(8)

著者	倉田 悟
著者別表示	KURATA S.
雑誌名	北陸の植物 = The Hokuriku journal of botany
巻	5
号	1
ページ	16-18
発行年	1956-01-15
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065444



倉田 悟※ シダ類ノート(8)

S. KURATA : Notes on Japanese Ferns (8)

(27) トヨグチウラボシ (行方・倉田新称)

本邦産のノキシノブ類については、シダとコケ No. 1 (1953年) に田川基二氏の詳しい解説があり、同好者にとっては無二の参考となる。所が、日本シダの会の重鎮である行方沼東氏は、1953年9月始め、南アルプスの前山というべき長野県下伊那郡豊口山のテンソウ岩(テゾラシ岩)附近の岩壁で、少く共本邦には未記録と思われるノキシノブ属の1種を採集された。豊口山は石灰岩より成る山で各所に大岩壁が聳立し、その特異な植物相については久保田秀夫氏が詳細に調査研究されている。特にシダ類については行方沼東氏も植物趣味 No. 52~53 (1954年) に紹介の筆を取られ、更に1953年以来3ケ年毎夏調査された豊口山のシダ目録を目下鋭意取纏められている。杉本順一氏の発見されたイナデンダ (*Polystichum inaense* TAGAWA) の type locality もこの豊口山であり、此所に更にトヨグチウラボシと新称するノキシノブ属の1種が見出された事は錦上華を添えるものと言えよう。今夏8月9日に行方・杉本・大村三氏等と共に私も豊口山に登り親しくトヨグチウラボシの自生を見る事が出来たので、以下その特徴と類縁関係を述べて見たい。

本羊歯の腊葉標本はちよつと見るとホテイシダの狭葉品に似ている。即ち葉面がノキシノブの葉の様には厚くなく紙質で脈理も表面からはかなり明らかに見える場合が多い。腊葉にした場合の葉質はかようにホテイシダより更に薄い程であるが、この度生品を見て驚いた事には、生では多漿質でノキシノブより更に厚い程である。しかし生でも側脈は表面から多少見える。この様な葉質のノキシノブ属植物は本邦には類例がなく、又腊葉からの記載ではちよつと判断出来ない。この点ベンケイソウ属植物の葉質を思わせるものがある。ホテイシダとはこの特異な葉質の他、ソーラスの楯状鱗片と根茎の鱗片が全く異なっている。根茎鱗片は卵状披針形で先端は通常糸状に伸長して長さ5cmに達し、辺縁には線状突起があり、又その網目は大型ですべて透明であるか基部中央の網目が僅かに淡褐色に着色している。ソーラスの楯状鱗片は極めて不規則な形を呈し、その辺縁は深く裂けている。本邦産ノキシノブ属の中ではコウラボシが稍々之に似た楯状鱗片を有するが、トヨグチウラボシの楯状鱗片の方が大きく又その網目も大型である。コウラボシとは勿論葉質・葉脈の分明さ(コウラボシでは全く見えない)・根茎鱗片等でも明らかに違っている。

以上の如く、トヨグチウラボシは本邦産ノキシノブ属中に近似の種類がない。しかるに台湾及び支那大陸には極めて近縁と判断されるものがある。それは台湾の大覇ウラボシと大陸の *Lepisorus clathratus* CHING である。タイハウラボシは1934年に正宗敬氏が新竹州の大覇尖山の山頂で採集し命名記載されたもので、其後1936年に田川基二氏は台北州

※ 東京大学農学部植物学教室 Institute of Forest Botany, Faculty of Agriculture, Tokyo University.

の南湖大山及び台南州の阿里山を新産地として記録されると共に、支那大陸方面の *Lepisorus clathratus* とは唯根茎の鱗片が少し大きい点で違うのみだからとの理由でその変種とされた。又更に 1942 年の田川氏の論文では兩種を全く合一されているらしい。私は兩種の標本は全く見ていないが、根茎鱗片はタイハウラボシが 2~3 mm 長、*L. clathratus* が 2 mm 長であるから、恐らく区別出来ないと思う。さてトヨグチウラボシは CHING 氏 (1934 年) の *L. clathratus* の図と比較して見ても分る様に、極めて之と近縁関係にある事が推察される。唯明らかに異なる事はトヨグチウラボシの根茎鱗片は前述の如く 5 mm 位に達しずつと大型である事と、その葉面の先端が長く漸次細まっている点である。しかし大陸品の葉先の形については CHING 氏もかなり変化のある事を述べており、又根茎鱗片にも台湾のタイハウラボシの如く稍々大型のものもあり、その網目の性質はトヨグチウラボシも全く一致する様である。今一つ葉質については CHING 氏は thin herbaceous と記載されているが、之は恐らく腊葉によつたもので、正宗氏は「一見ノキシノブに似ているが之より其の質が厚く」と明記され、トヨグチウラボシの葉質と一致すると思う。かかる観点から私はトヨグチウラボシを *L. clathratus* の 1 変種と考えたい。テバコワラビ・タカネシダ同様の支那大陸系のトヨグチウラボシがかくも隔離して本州中部の豊口山に生育する事は、大石灰岩壁といったその生育地と結び付けて大変興味深い。

Polypodium clathratum (= *Lepisorus clathratus*) という学名はかつてコウラボシに当てられた事もあり、我が国のフロラには多少縁があつた。大陸ではヒマラヤから西支那・北西支那・シベリヤ・天山方面の海拔高 3000 m 位を中心とした高地に生育し、台湾でも同様である。トヨグチウラボシも 2000 m に近い所に生育し、前に牧野先生 (1929 年) がコウラボシと *L. clathratus* の差違を論じた時指摘された生育地の矛盾はトヨグチウラボシと *L. clathratus* との間には全然無い。

(27) ***Lepisorus clathratus*** CHING in Bull. Fan Memor. Inst. Biol. 4 : 71 (1933) ; Ic. Fil. Sin. 2. pl. 67 (1934) ; TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 11 : 307 (1942).

Polypodium clathratum CLARKE, MAKINO in Journ. Jap. Bot. 6 : 366 (1929).

Polypodium papakense MASAMUNE in Journ. Soc. Trop. Agr. 6 : 569 (1934).

Lepisorus clathratus var. *papakense* TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 5 : 111 (1936).

var. ***Namegatae*** KURATA var. nov.

A typo differt squamis rhizomatis distincte majoribus, 3-5 mm longis, 1-1.5 mm latis.

Rhizome creeping, 1-1.5 mm in diameter, densely scaly; scales fuscous, iridescent, membranaceous, lanceolate or ovate-lanceolate, 3-5 mm long and 1-1.5 mm wide, acuminate at apex, rounded at base and peltately attached to the rhizome near the base, with some long-protruding teeth on the margin, clathrate with luminae, which are large, thin-walled, uniform and more or less oblong longitudinally. Stipes 1-4

cm long, stramineous, glabrous. Laminae lanceolate to linear-lanceolate, 5—15 cm long, 0.6—1.5 cm wide, gradually attenuate towards both ends, entire or slightly undulate on margin; texture thick and succulent but chartaceous when dry, color light green, glabrous above, at first sparsely with scales (similar to those on rhizome but smaller) beneath; costa prominent, elevated on both surfaces or grooved above, venation more or less visible on upper surface but almost not on under surface. Sori a little nearer to costa than to margin, rounded, 2—3 mm wide, covered with peltate scales, which are deltoid-rotundate, irregularly laciniate on margin and similar to scales on rhizome in color and texture.

Hab. Honsyû : Mt. Toyoguti, Oosika-mura, Kamiina-gun, Prov. Sinano (T. NAMEGATA no. 3434, Sep. 1953 — the type in Herb. Fac. Agr. Tokyo Univ.); *ibid.* (S.KURATA, Aug. 1955).

This Japanese fern is disjunctively distributed to central Honsyû far from the area of *Lepisorus clathratus* and seems to be a geographical variety of the continental species. In relation to this thinking, it is very interesting that this fern grows only on limestone cliff about 2000 m above sea level and stretches its rhizome in the crevice.

河野昭一※ 膽振国徳舜磐高地植物の概要 (2)

S. KAWANO : A Synoptical Sketch of the Alpine Vegetation of the Tokushunbetsu Mountainland, Prov. Iburi, Hokkaido.

72. *Rubus pedatus* SMITH コガネイチゴ (T)
73. *R. pseudo-japonicus* KOIDZUMI ヒメゴヨウイチゴ (H 井口, O)
74. *R. strigosus* MICHAUX ウラジロエゾイチゴ (H)
75. *Sieversia pentapetala* GREENE チンゲルマ (O, T)
76. *Prunus nipponica* MATSUMURA タカネザクラ (T-H 岡本, 井口)
var. *kurilensis* WILSON チシマザクラ (O, T, H)
77. *Geranium erianthum* DE CANDOLLE チシマフウロ (O, T, H)
78. *Oxalis acetosella* LINNAEUS コミヤマカタバミ (O, T, H)
79. *Ilex rugosa* FR. SCHMIDT ツルツゲ (T, H)
80. *I. Sugeroki* MAXIM. var. *brevipedunculata* OHWI アカミノイヌツゲ (O, T, H)
81. *Evonymus tricarplus* KOIDZUMI ムラサキツリバナ (T 井口)
82. *Acer Tschonoskii* MAXIMOWICZ ミネカエデ (O, T, H)

※ 北海道大学一般教養部